

「解剖実習が教えること」と題する以下の文章を読み、あなたの考えを述べなさい。

医学生にしる臨床医にしる、実は恵まれた環境に置かれている。裕福という意味ではなく、答えは一つにはなりにくいという哲学の場にいる、という意味で、より真実に近づきうる恵まれた環境という意味である。

たとえば、医学生にとっての重大事の一つに、解剖学実習がある。「ひょっとして、将来、ほんとうに医師になるのかも知れない。いや、なるんだ。なるぞ」という気分が湧きうる可能性のある実習だ。その実習の中で、いろいろな神経、血管、臓器や骨の名などを覚えるのだが、その他にもう一つ学ぶ重大なことがある。教科書通りには遺体の解剖はなっていない、という発見である。隣りの遺体はどうかとのぞいてみると、別の所で全く教科書と違っていたりする。教科書通りの遺体は一体もない、ということをお知らせされる。

教科書通りの正しい解剖を持った遺体を○として、教科書とは違う解剖を持った遺体を×とすると、全ての解剖室で解剖台の上に横たわっている遺体は×ということになる。一人ひとりの全ての人間が×ということとはありえない。一人ひとり、それぞれ一人ひとりの存在である。総合的に標準として作製した解剖図、統計的に出来上がった解剖図を実際に持ち合わせている人間なんてまずいない、ということになるのか。

そういう大切なことを学習しているにもかかわらず、またいつの間にか一つの正しい答えがあるという世界へ、医師たちは陥っていきやすい。

(徳永進『こんなときどうする? — 臨床のなかの問い』)